

## 宮津港の「みなと文化」

似内 恵子

---

## 目 次

|                                                     |       |
|-----------------------------------------------------|-------|
| はじめに.....                                           | 56-1  |
| 第1章 宮津港の整備と利用の沿革.....                               | 56-2  |
| 1. 古代～中世 .....                                      | 56-2  |
| 2. 近世 .....                                         | 56-3  |
| 3. 近現代 .....                                        | 56-4  |
| 第2章 「みなと文化」の要素別概要.....                              | 56-6  |
| 1. 船を用いた交易・交流活動によって運び伝えられ、育ってきた「みなと文化」...           | 56-6  |
| (1) 言語 .....                                        | 56-6  |
| (2) 信仰 .....                                        | 56-6  |
| (3) 食べ物.....                                        | 56-9  |
| (4) 人物 .....                                        | 56-10 |
| 2. 交易による流通市場の形成によって育ってきた「みなと文化」 .....               | 56-11 |
| (1) 物資の流通を担う産業.....                                 | 56-11 |
| (2) 交易物資の保管施設.....                                  | 56-14 |
| (3) 行政施設.....                                       | 56-14 |
| 3. 航路ネットワークを利用した地場産業の発達によって育ってきた「みなと文化」.            | 56-14 |
| (1) 港湾利用産業（原料の搬入・製品の積み出し） .....                     | 56-14 |
| (2) 漁業 .....                                        | 56-16 |
| (3) 漁業風習.....                                       | 56-20 |
| 4. 港を介して蓄積された経済力に基づき、<br>人々の生活の中で育ってきた「みなと文化」 ..... | 56-20 |
| (1) 遊里 .....                                        | 56-20 |
| (2) 文芸 .....                                        | 56-22 |
| (3) 祭り .....                                        | 56-24 |
| (4) 資料館.....                                        | 56-25 |
| 5. 港を中心とする社会的・経済的営みの総体として形成されてきた「みなと文化」.            | 56-26 |
| (1) 港・海運に関する歴史的施設.....                              | 56-26 |
| (2) 港の町並み.....                                      | 56-28 |
| (3) 港の景色.....                                       | 56-32 |
| 第3章 「みなと文化」の振興に関する地域の動き.....                        | 56-34 |
| 1. 天橋立サンドバイパス工事.....                                | 56-34 |
| 2. 蕪村まつり .....                                      | 56-35 |
| 《引用文献》.....                                         | 56-36 |
| 《HP関係図等出所》 .....                                    | 56-36 |

所在地：京都府宮津市

港の種類：港湾

港格：地方港湾



【位置図】  
(京都府 HP)



【現況写真】  
(京都府 HP)

## はじめに

宮津港は若狭湾の西部にあって、宮津湾及び天橋立（あまのはしだて）で仕切られた阿蘇海（あそかい）の沿岸部に位置する。天橋立の東側が宮津湾で西側が阿蘇海となっている。

宮津港は、日本三景の一つ「天橋立」を擁する地方港湾で、定期船航路など観光港として利用される他、鉱石輸入港や漁業の拠点として利用されている。

また、宮津市内には5つの漁港がある。

第一種：田井・島陰・溝尻・由良漁港

第二種：養老・栗田（くんだ）漁港



〔資料〕パンフレット、「京都の水産」  
【宮津港と宮津市の漁港位置図】

## 第1章 宮津港の整備と利用の沿革

### 1. 古代～中世

宮津市周辺では、縄文・弥生・古墳時代の遺跡が多く発掘されている。

縄文時代早期の土器が阿蘇海沿岸の中野・国分遺跡で出土しており、脇（栗田地区）の城ヶ谷遺跡では、石棒と呼ばれる縄文時代の石製の祭祀具が採集されている。

弥生時代になると大陸から水稻耕作技術や金属器などが伝わり、丹後半島では一般の墓よりひときわ規模の大きな墳丘を持つ、方形貼石墓（ほうけいはりいしば）と呼ばれる墳墓に葬られるムラ長が出現した。

宮津市でも平成 17 年（2005 年）に難波野（なんばの）遺跡で同墳墓が 2 基発見され、日置塚谷遺跡では、朝鮮半島系の青銅製器を模した祭祀具、銅剣形石剣が出土している。集落は、日置、府中地区をはじめ須津の霧ヶ鼻・小霞遺跡、上宮津の宮村・桑原口遺跡、栗田半島の獅子遺跡など広範囲に分布するようになる。

弥生時代末から古墳時代初頭頃、丹後のムラ長の墓はさらに巨大化し、全国的にみても最大級の規模をもつようになり、宮津地区でも、波路や由良川沿いに規模の大きい墳墓が作られた。

最も多く古墳が作られた後期には、横穴式石室を持つ直径十数 m の小古墳が、数基から数十基の群を成して築造され、須津小字大谷と与謝野町堂谷の境に点在する霧ヶ鼻古墳群をはじめ、小路山古墳・寺嵯峨古墳（須津）、小田古墳・ひなた古墳（栗田）などが知られている。

和銅 6 年（713）4 月 3 日、旧丹波国の 11 郡から、北部の 5 郡が割かれて丹後国が置かれ、宮津市域は、由良地区が加佐郡であったとみられるほかは、全域が与謝郡にあった。

丹後国の国分寺は、現在は遺跡（国史跡）となって宇国分に所在し、京都府立丹後郷土資料館が隣接する。ただし、露出する遺構は南北朝時代の堂塔伽藍である。



【国分寺史跡（筆者撮影）】



【国分寺跡の遺構（筆者撮影）】

奈良時代の国分寺を知る手掛かりとして、軒丸や軒平瓦や円面硯などの出土品、天平勝宝 8 年（756）には聖武天皇の一周忌に備えて幡が贈られる記事（『続日本紀』）などが、少ない中にも挙げられる。

国分尼寺・国府は、所在場所を含めいまだ明らかになっておらず、地名などから推測されるのみである。

丹後国に赴任した最も著名な国司は和泉式部の夫である藤原保昌（やすまさ）である。平安時代中期の治安 3 年（1023）頃から式部を伴って丹後へ下向した。

その間に式部が、都との間を往来する夫不在の心細さを詠んだ歌

「まつ人はゆきとまりつつあぢきなく としのみこゆるよさのおほ山」

は、娘の小式部内侍の詠んだ

「おほえ山いくのの道の遠ければまだふみもみずあまのはしだて」

の歌とともに、今日にも広く知られている。

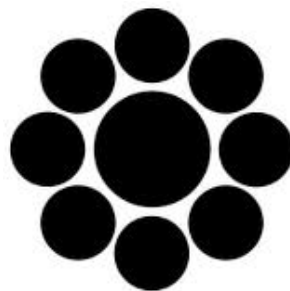
宮津は平安時代後期に、宮津庄という庄園で長講堂の所領となり、御簾や御座、畳などさまざまな税を負担していた。源平の内乱の頃は、丹後国は平氏が支配した。

宮津庄の広さは 155 町（約 155ha）と記されており、かなり広い庄園であったと思われる。

鎌倉時代に丹後国を支配した守護については、ほとんど不明である。

14 世紀終わり頃から守護職はほぼ一色氏に固定され、一色氏は戦国時代も引き続き丹後北半国を支配していた。

天正 8 年（1580）、細川藤孝が功により丹後南半国の領主となる。



【細川氏家紋（九曜紋）】

天正 10 年（1582）6 月、明智光秀が本能寺の変を起こし、藤孝・忠興父子を味方に誘ったが、父子は誘いを拒否し、玉子（洗礼名ガラシャ・明智光秀の娘で忠興の正室）を丹後国の味土野（現在の京丹後市弥栄町須川付近）に幽閉して、反光秀の態度を示した。頼みの細川父子に協力を断られたことが、光秀の滅亡を決定的にしたといわれている。

このとき、忠興は父が隠居したので領国である丹後南半国を譲られ、丹後宮津城主となった。忠興は北丹後の一色満信を殺した後一色家旧臣を攻め滅ぼし、秀吉から丹後全域の領有を許された。永らく丹後を支配した守護一色家はここに滅亡する。

細川家はその後、忠興の手腕により豊前・豊後に領地を得ることとなる。

## 2. 近世

京極高次の弟である高知は、家康から丹後 1 国を与えられ、丹後宮津城 12 万 3 千石を領したが、寛文 6 年（1666）高知の孫・高国の代で改易となった。

その後、わずかな天領の期間をはさんで、寛文 8 年（1668）の永井氏の入部から、宝暦 8 年（1758）の青山氏の郡上転封までの期間に、永井・阿部・奥平・青山の武功派とよべる有力譜代大名が、次々に交代した。

以降、幕末まで、本庄氏が宮津を支配することとなる。

本庄宗正の娘光子は三代将軍家光の側室となり、その子が五代将軍綱吉となった。本庄家は、その威光により光子の兄弟が次々と幕臣となり、大名となった家柄である。新興大名である本庄氏は、宮津藩主となった他の大名と異なり、軍功を挙げたことはなく、積極的に幕府の要職につこうとした。

### 3. 近現代

明治以降で特記すべき事項は以下の通りである。

明治 2 年（1869）：版籍奉還。

明治 4 年（1871）：廃藩置県。

明治 8 年（1851）：小室信介を中心に、天橋義塾が開設される。

大正 13 年（1924）：舞鶴・宮津間の鉄道開通。

昭和 27 年（1952）：天橋立が国の特別名勝に指定される。

昭和 29 年（1954）：与謝郡宮津町・栗田村・吉津村・府中村・日置村・世屋村・養老村・日ヶ谷村が合併し、市制施行。

昭和 31 年（1954）：加佐郡由良村を編入。

平成 19 年（2007）：中央環境審議会の答申を受けて、「丹後天橋立大江山国定公園」が誕生。

一方、宮津港の整備は近代より行われてきた。本来の宮津城の位置は現在よりもっと海岸線に近いものであったと思われる。

また、度重なる整備と埋立てにより、海岸線の位置も大きく変化している。次図に示す新浜（宮津港最大の花街）は、海岸沿いにあったことがわかる。

海運が鉄道にとって代わられる前は、宮津港から連絡線が発着しており、その遺構等も旧海岸線付近に見ることができる。



〔資料〕宮津市教育委員会資料

【宮津港の図】



## 第2章 「みなと文化」の要素別概要

### 1. 船を用いた交易・交流活動によって運び伝えられ、育ってきた「みなと文化」

#### (1) 言語

宮津で話される言葉は、丹後弁に属する。

丹後西部と丹後東部ではアクセントに大きな違いがある。宮津は丹後西部に属する。

以下に方言の一部を挙げる。

- ・よんのう暗なったなあ（すっかり暗くなりましたね）
- ・しんきいことばかり言うて（めんどくさいことばかり言って）
- ・ひいさ、やっとなったで（長い間しておられた）

#### (2) 信仰

信仰の対象として、仏教では大頂寺、キリスト教ではカトリック宮津教会を紹介する。また、宮津付近で漁業に従事する人々の信仰として、「大島さん参り」と「蛭子講」を紹介する。

##### ①大頂寺

大頂寺は、京極高広が宮津藩主になるにあたり、東照大権現宮家康、2代將軍秀忠、3代將軍家光御法楽のため、現在の地、金屋谷に引き移し、明治維新まで歴代宮津藩主の菩提所となった寺である。代々城主は、徳川將軍家の御位牌を奉納する習わしであった。その際、徳川家御霊家を建て、2代、3代將軍の宝篋印塔3基（境内に現存）を建立した。

江戸中期の宝暦9年（1759）、本庄資昌が国替えにより藩主として浜松から宮津城に入城した。本庄家は3代將軍家光の側室、5代將軍綱吉の生母である桂昌院が遠祖で、徳川將軍家とは姻戚関係にあった。

本庄資昌は、代々城主の菩提寺の大頂寺に本庄家御霊屋を造り、桂昌院の念持仏や本庄家歴代の位牌を安置した。このような歴史を有する大頂寺には、徳川家由来の文化財が存在する。

##### ②カトリック宮津教会・「洗者聖ヨハネ天主堂」

カトリック宮津教会は明治21年に宮津に来たルイ・ルラブ神父により創立された。現在の教会建物は明治29年に完成、当時としては珍しいフランス風の構造で、かつ、木造・畳敷きという日本式の、和洋折衷のロマネスク式の建物で、ヨルダン川でキリストに洗礼を受けた聖ヨハネを保護者としており、「洗者聖ヨハネ天主堂」と



〔資料〕宮津市 HP

【大頂寺】



【カトリック宮津教会外観】  
(筆者撮影)



呼ばれた。

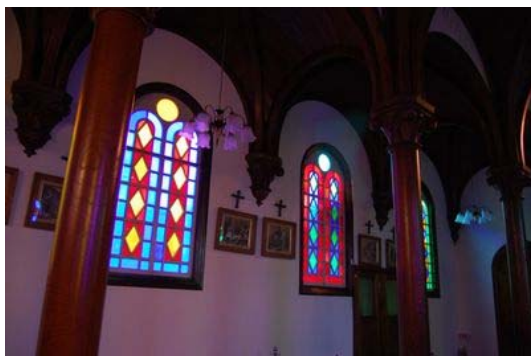
今に残るフランス直輸入の色あざやかなステンド・グラス、けやきの柱、ドーム式の天井などは、長崎の大浦天主堂などと並んで、明治中期の面影をとどめる貴重な教会建築であり、今も毎週ミサの捧げられる現役の聖堂としては、日本で最も古いものとされている。



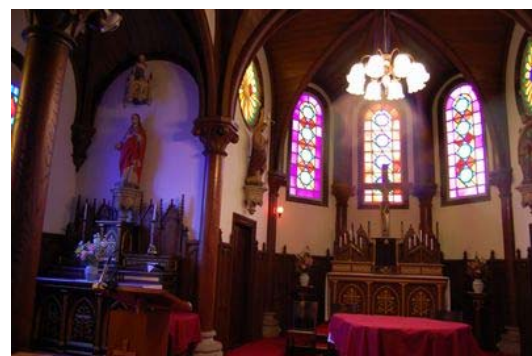
【通りから教会を見る（筆者撮影）】



【教会内部 1（筆者撮影）】



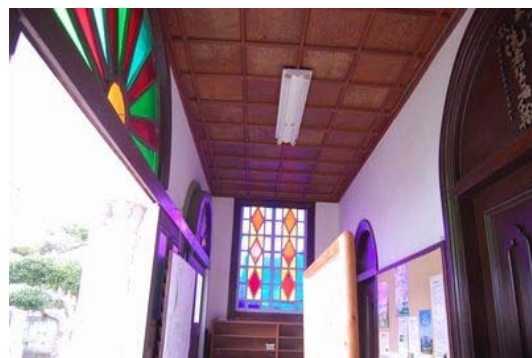
【教会内部 2（筆者撮影）】



【教会内部 3（筆者撮影）】



【教会内部 4（筆者撮影）】



【教会入り口（筆者撮影）】

### ③大島さん参り

四月下旬、若狭湾に浮かぶ冠島は、別名・雄鳥、大島と呼ばれ、漁師町では親しみを込めて大島さんという。隣の沓島は雌鳥、小島と呼ぶ。冠島に対して沓島、また雄島に対して雌島、あるいは大島に対して小島といった具合である。

冠島には、老人嶋（おいとじま）神社、船玉神社、瀬ノ宮神社の三つの神社がある。そこに祀られている神々に海上安全と大漁を願って船を仕立てて参る。

江尻のように、大島さん参りは6月1日と事前に決められている地区もあるが、漁師町の場合は、「ええ風の日」を選んで参る。

前日に「明日はええ風になりそうなので、参ることにしようか」といった具合である。はじめて大島さんへ参る人は、大島さんが大きくなるようにと、必ず石を持参して、海岸に置くようにと伝えられている。

また女の人が大島さんへ行くことを嫌う。

船は紅白の職に「御嶋大明神」と染め抜かれた職を立て、湾内の端から端までめぐり「元気に詣ってくるぞ」と太鼓や笛の磯子で景気良く告げ、大島さんをめざす。

かつて大島さんへ向かう道中では、「これから島参りへ行くので、魚を持って参るのでおくれ」と、宮津に入ってくる漁船に声を掛け譲り受けながら向かったという。

大島さんでは、遠浅の荒磯のため、舳（はしけ）で分乗して上陸する。地区によって、老人嶋神社、船玉神社、瀬ノ宮神社の三つの神社に参ることもあるが、漁師町の場合は、持参した御神酒と小鯛二匹を腹合わせに吊ったカケノイオ（掛けの魚）を老人嶋神社に供え、拝殿前で全員揃って手を合わせるだけで、他の神社には参らない。

大島さんでは波が高く上陸できない場合は、老人嶋神社の鳥居に向かって手を合わせ、持参した御神酒とカケノイオを海へ流して早々に引き上げ、代わりに伊根町新井にある恵比須さんへ向かった。新井の恵比須さんは新井漁港の奥まった入江に祠があり、そこに参ったこともあったという。今日では、ほとんど新井の恵比須さんに参ることはない。

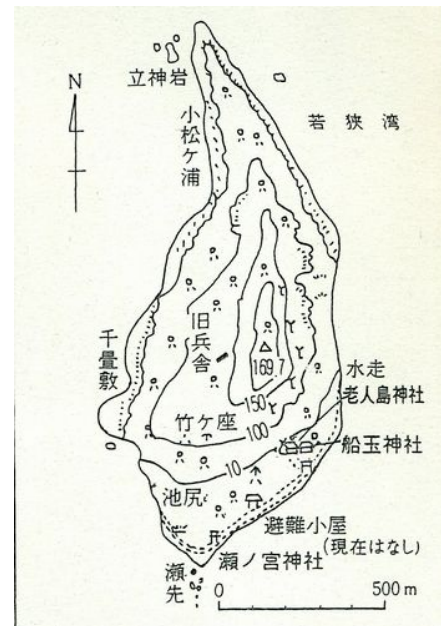
その後、伊根浦の湾口に浮かぶ青島に上陸して、蛭子神社に詣でる。

かつては無事帰り着いてから、詣った人たちをねぎらって直会が催されたが、今日では青島の下の方居周辺で行われる。

最後に橋立の中ほどにある橋立明神に詣でる。港近くになると一段と太鼓の音が響きわたり、浜に出迎えた人びとに、「無事帰ってきたぞ」と告げる。

かつての大島さん参りは櫓と擧を使って、4時間余りもかけて行かなければならなかった。出発の時は風であっても、大島さん近くになると風が強くなり、上陸できずにやむなく引き返さなければならぬこともあった。今ではモーター船を使って40分ほどである。

今日では大島さん参りは1回だけであるが、大正3年(1914)までは、豊漁祈願とともに山王祭りの無事を祈って四月と六月の2回参った。当日には町内5か所に「老人嶋神社」の幟を立てたという。



〔資料〕「宮津市史」  
【冠島地図】

#### ④蛭子講

11月20日、大網の音頭元（網元）の家では、日頃お世話になっている網子を招き、一年の労をねぎらい、十分にご馳走してもてなす。現在では2軒になった音頭元の家でも、この行事は続けられている。また、宮津水産仲買人組合では11月のカニ解禁日近くの大安の日を選び、小豆御飯を炊いて、宮津藩主本庄宗秀が描いた巨大なエビス様を掲げて、「蛭子祭り」が行われている。

### （３）食べ物

#### ①丹後とり貝

トリガイは本州から南の内湾の海底に生息する二枚貝で、京都府では宮津湾、栗田湾及び舞鶴湾の海底に生息している。一般に流通しているトリガイの殻の大きさが6cm前後であるのに対して、京都府産のものは10cm前後と大型になる。

京都府北部の丹後の海は、一年中トリガイにとって住みやすい穏やかな環境であり、プランクトンも豊富なので、トリガイの寿命は2～3年となり大きく育つ。



〔資料〕天橋立観光協会パンフレット

【丹後とり貝】

京都府農林水産技術センター海洋センターでは、全国で唯一大型トリガイを育てる技術を完成させ、事業化に成功した。

5月初めに採卵、7月中旬頃に大きさ1cmサイズで生産者が育成を開始して、翌年5月～7月頃に8.5cm前後に成長したものを収穫する。

この育成されたトリガイのうち殻付重量100g以上のものが「丹後とり貝」となる。

#### ②シロメ（シラス）とちりめん雑魚

片口イワシの雑魚は愛称をシロメ（シラス）と呼び、広く知られている。このシロメは雑魚と同様に大釜で塩水を熱湯にして茹で上げる。

これは地元では「釜揚げ」と呼んで好まれている。しかし、この釜揚げ状態では日持ちが悪く、冬場だけの出荷に限定された。

近年では鮮魚・塩干魚の輸送も保冷車の利用によつて、年間通じて出荷が可能になった。その釜揚げしたシロメを天日で干し上げたものが「ちりめん雑魚」で、宮津湾の天橋立沖で捕れるシロメは色もよく味もよく、高級品として喜ばれている。



### ③ヘシコ（糠漬）

魚を糠で漬け込んだものをヘシコ（糠漬）と呼ぶ。生イワシ、とくに大羽イワシを塩漬けして一昼夜ぐらい置き、糠と塩を合わせたものを振りかけながら漬け込む。約一か月余りを置くと味の良いヘシコができあがる。魚の漬物であるヘシコは、腐敗を防ぐために多くの塩を用いる。

たいそう塩辛い、一度にたくさん食べられるものではないが、魚の生臭い臭いもなく、イワシ特有の油の味が発酵した糠の味とほどよく混ざりあっている。近年はイワシのほか、サバやアジなども利用されている。

激しい労働のあとや暑さのため食欲の減退する時期に食べるにはもってこいの食物である。

### （４）人物

宮津に関連する人物として天橋義塾の創設者である小室信介・沢辺正修と与謝野鉄幹を挙げる。

#### ①「天橋義塾」小室信介・沢辺正修

1) 小室信介（こむろしんすけ）：嘉永 5 年（1852）～明治 18 年（1885）

自由民権運動家。父は宮津藩士小笠原忠四郎長繩（二男）。京都宮津市出身。号、案外堂。

はじめ藩校「礼讓館」に学び、京都で中沼了三に師事。明治 5 年（1872）、小学校教員となる。明治 8 年（1875）、沢辺正修・小室信介・栗飯原光らの旧士族の子弟が、自由民権教育をさずける道場として「天橋義塾」を建てる。翌年慶応義塾に入る。

2) 沢辺正修（さわべせいしゅう）：安政 3 年（1856）～明治 19 年（1886）

小学校教員をつとめ、明治 8 年、故郷の宮津の天橋義塾社長となり、自由民権をとなえる。明治 13 年（1880）、18 国会期成同盟第 2 回大会に京都府総代として出席、同会の幹事となる。明治 14 年（1881）、大阪で立憲政당을結成し幹事、明治 17 年京都府会議員。

3) 天橋義塾の成立から解散まで

明治 7 年（1874）、板垣退助ら人名は愛国党を結成し、国会の開設を要求する「民撰議院設立建白書」を政府に提出。そのメンバーの一人に、岩滝村（甲与謝野町）出身の小室信夫（こむろしのぶ）がいた。生糸ちりめん販売を営む豪商の家に生まれた信夫は、その後、日本郵船会社の理事や貴族院議員となり、明治維新に貢献した。

信夫の娘婿である小室信介は、藩校の廃止後、教育機会を失っていた子弟のため、宮津に「天橋義塾」を創設。塾社長であり活動家であった沢辺正修の牽引により、天橋義塾は丹後における民権運動の拠点となった。

明治 10 年（1877）、西南戦争が始まり、「天橋義塾」の幹部たちは、西郷党にくみする恐れがあるとして相次いで拘留された。出獄後、明治 11 年（1878）10 月、「天橋義塾結社大意」を改正し、「大阪日報」に発表。

これ以降、「天橋義塾」は、教育結社に加えて政治結社



【丹後郷土資料館・天橋義塾関連展示】（筆者撮影）

的性格となり、明治政府の弾圧をさらに受けることになり、明治 17 年（1884）、ついに解散させられた。

宮津小学校内（宮津市字外側 2508）に天橋義塾記念碑があり、丹後郷土資料館には天橋義塾社則・天橋義塾維持講名簿・天橋義塾記念扇子・社員証・教科書類が展示されている。

## ②与謝野鉄幹（1873～1935）・晶子（1878～1942）

近代短歌の祖といわれる与謝野鉄幹は、父礼厳が与謝野町温江の生まれである。鉄幹は僧侶であり歌人でもあった父礼厳のふるさと丹後へ、妻である与謝野晶子を伴って訪れ、夫婦で数多くの短歌を残した。

大正 4 年（1915）、衆議院議員選挙に京都府郡部から立候補した鉄幹は、丹後各地で選挙演説を行った。

昭和 5 年（1930）には、夫婦で天橋立や琴引浜を歩き、翌年もまた、丹後を訪れている。鉄幹亡き後の昭和 15 年（1940）には、晶子が末娘を伴って天橋立を訪ねた。

## 2. 交易による流通市場の形成によって育ってきた「みなと文化」

### （1）物資の流通を担う産業

宮津の代表的な商家として、『三上家』を紹介する。

三上家は、本家三上家・宇兵衛の次男勘兵衛が安永 5 年（1776）に分家して、現在地に屋敷を構えたのに始まる。同家は江戸時代において、酒造業、廻船業、糸問屋等を営む一方、藩財政や宮津城下の町政に深く関わっていた商家である。

元結屋（もっといや）の屋号は、元結の製造・販売を手がけたことによると伝えられている。また、明治維新の慶応 4 年（1868）には山陰道鎮撫使・西園寺公望の宿所となった。

主屋は天明 3 年（1783）の建築で、入母屋造妻入で切妻が軒を並べる宮津の町屋のなかでは異彩を放っている。

防火の配慮から、外部に面する柱や垂木を全て塗り込める大壁造（土蔵造）とし、美しい白壁の外観をつくりだしている。住宅全体をここまで土蔵同様の耐火構造とすることは珍しい。

### 《旧三上家外観》



【旧三上家外観 1】（筆者撮影）



【旧三上家外観 2・重要文化財の表示】  
（筆者撮影）



【旧三上家外観3】（筆者撮影）



【旧三上家外観4】（筆者撮影）

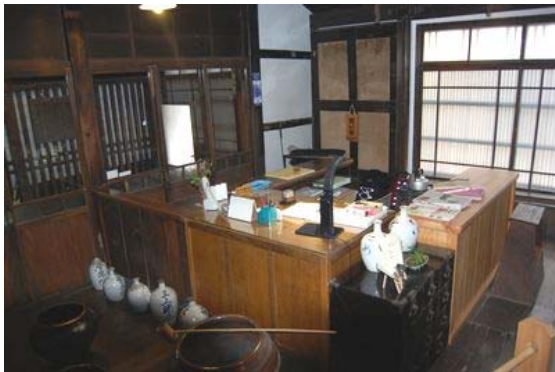
また、吹抜けの内部には米を蒸す釜場や麴室などの酒造施設がよく残されている。

文政3年（1820）には主屋に隣接して新座敷棟が、天保8年（1837）には質の高い庭座敷棟が建て増される。

その道側に取り付く玄関棟と表門は、天保9年に宮津藩視察に来た幕府巡見使を迎えるにあたり急遽増築されたものである。

建物は国の重要文化財に指定されている。庭園に使用された庭石は、北前船によって運ばれたものであると言われている。

#### 《旧三上家内部》



【店の間】（筆者撮影）



【三上家の酒「都小町」の看板】  
（筆者撮影）



【土間部分】（筆者撮影）



【天井部分】（筆者撮影）



《旧三上家玄関と庭座敷》



【玄関棟と表門】（筆者撮影）



【表門】（筆者撮影）



【庭座敷】（筆者撮影）



【庭座敷】（筆者撮影）

《旧三上家庭座敷詳細》



【茶室より庭園を望む】（筆者撮影）



【繊細な書院の造り】（筆者撮影）



【庭座敷より庭園を望む 1】（筆者撮影）



【庭座敷より庭園を望む 2】（筆者撮影）

## （２）交易物資の保管施設

現在、交易物資の保管場所として残るものは少ない。

古地図等から、主に大手側左岸に宮津藩蔵があったのではないかと考えられている。

## （３）行政施設

本庄家が支配する近世後期の宮津藩は、民政の基礎となる三機関として「寺社役所」「郡役所」「町役所」を置き、各役所の長には、それぞれ寺社奉行（２人）、郡奉行（３人）、町奉行（兼船奉行）２人が任じられ、一括して三奉行とよばれていた。三奉行制は、幕府が、寺社・勘定・町の各奉行を三奉行と称したことに倣った制度であろう。

町奉行の配下には、「手附」（１人）のほか、「物書」（１人）、「小頭」（１人）がおり、その下で町内の巡回や町人の召喚など、日常的な町政の執行にあたっていたのが「町組」に組織された、いわば平の武士たちであったようである（「名主役日記和」三上家文書、『宮津事跡記』）。

「町組」の武士の定員については残念ながら分からないが、これら町奉行・手附や「町組」の武士たちに協力して町政を担ったのが、六幹町に置かれた６人の「町名主」と、各町の組頭、総勢 70 人余であった。（宮津城下は町名主が置かれる幹町と、その触下となる町とからなり、六幹町と称される。）

## ３．航路ネットワークを利用した地場産業の発達によって育ってきた「みなと文化」

### （１）港湾利用産業

宮津港は、江戸期には西廻り海運の湊町として栄えた。

三上家文書の中に近世後期のものと思われる「宮津町産物類取調言上帳」という史料がある。そこには、①蠟燭並に鬢付油、②下駄足駄、③建具小細工、④生魚、⑤直安之菓子類、⑥酒、⑦煎海鼠、⑧絹縮緬・紬、⑨榎実、⑩桐実、⑪漆、という 11 種の品目が並べられており、それらの販売先、原料の入手先などについて簡単に触れている。それらを検討すると、11 種の産物は、流通圏の広狭によって大きく次の三つに分類される。

第一は、「町方並近在」「地廻り」へ売り捌くとされているもの・宮津を中心にして比較的小さな範囲で流通しているものである。②下駄足駄、③建具小細工、⑤菓子、⑥酒がこ



れにあたる。

第二は、「近国へ売捌申候」とされるものであり、①蠟燭並に鬢付油、④生魚、⑪漆などがこれにあたる。

また「周辺若狭越前江売出し申候」という⑬桐実も、このグループに入る。このグループは、丹後一国を越えて、第一のグループより広範囲に流通していたものである。

第三は、全国市場で流通していたと思われるものである。北は東北・北関東から近畿・北陸に至る諸国から糸を買い集め、領内産の糸とともに、これを縮緬・紬に織り立てて、「地壳並京都問屋江差出売捌申候」という⑧の絹縮緬・紬と、⑨の樫実である。ただし樫実は、領内をはじめ若狭・丹波・但馬より廻ってきたものを「職方之者生蠟ニ仕立、地廻り並京都・丹波・若狭・越前・摂津・播磨其外船積にて諸国え売」とあるので、実のままだではなく生蠟に加工して全国市場に乗せていたことがわかる。また、全国市場に出回っていたものであるとはいえないが、⑦煎海鼠は、長崎貿易のために大坂の俵物方役所へ出荷されている。「縮緬・紬」と「樫実（生蠟）」がもっとも広い販路をもつ、宮津を代表する産物であったということになる。宮津の産物としてあげられていた「絹縮緬・紬類」は、「丹後絹物」として京都の問屋の手で全国に流通した。京都には、丹後絹物を一手に引き受ける「丹後絹物京問屋」仲間があり、「国方」と呼ばれる宮津の生産者・荷主たちに強い支配力をもっていた。

京都府立丹後郷土資料館（ふるさとミュージアム丹後）には、北前船の模型 2 艘と船絵馬が展示されている。

展示物の中で興味深いのは、「裂織」である。「裂き織」は「サックリ」または「サッキヨリ」と呼ばれ、細く裂いた木綿を横糸に織り込んだ織物である。この「裂織」の素材である古木綿が大阪周辺から北前船によって日本海沿岸に運ばれ、普及したと言われている。



【京都府立丹後郷土資料館展示室 1】  
（筆者撮影）



【京都府立丹後郷土資料館展示室 2】  
（筆者撮影）



【展示中の裂織 1】（筆者撮影）



【展示中の裂織 2】（筆者撮影）

## （２）漁業

### ①京都府漁業の特色

京都府の海岸線は約 315km で、西は兵庫県、東は福井県と接している。

丹後半島北端の経ヶ岬を境にして、東側は若狭湾に含まれ、起伏に富んだリアス式海岸となり、比較的穏やかな海域である。一方、経ヶ岬の西側は日本海の荒波に直面し、岩礁、砂丘域が連なるダイナミックな景観を形成している。また、舞鶴湾、宮津湾、久美浜湾など年間を通じて穏やかな内湾も見られる。



〔資料〕京都府水産事務所、「京都の水産」

【京都の海】

京都の海には九州南方沖で黒潮から枝分かれし日本海に入る対馬暖流と、日本海固有水という冷たい海水の両方が影響を与えている。また、沿岸域には丹後半島あるいは丹波山地の緑豊かな山々に源を発する河川から栄養豊かな水が流れ込み、砂泥域ではアマモ類、岩礁域ではホンダワラ類やクロメなどによる藻場が形成されている。

このような海流、海水、地形の特性を備えた京都府の海では、地域の特性に応じた多様な漁業が営まれ、四季折々、様々な魚介類が水揚げされている。例えば、対馬暖流に沿っ



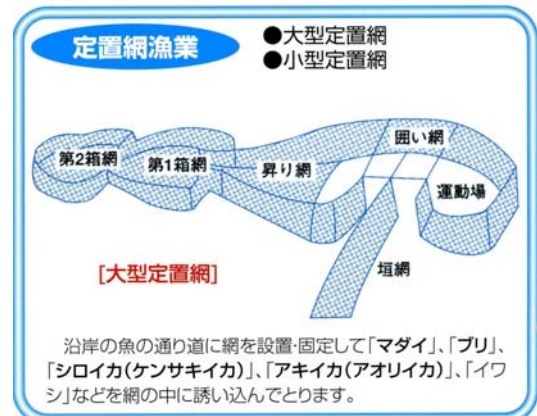
て日本海を回遊するブリ、マグロ、サワラなど暖海性の魚の他に、日本海固有水に生息するズワイガニ、ハタハタなど冷水性の魚介類が漁獲される。

また、内湾域ではトリガイ、マガキなどの貝類養殖が盛んに行われている。

さらに、沿岸の岩礁域ではワカメなどの海藻類やアワビ、サザエなどの貝類が漁獲されている。このような恵まれた環境のもと、宮津でも古くから漁業が営まれてきた。



【小田漁港（栗田漁港泊地）】（筆者撮影）



〔資料〕京都府水産事務所、「京都の水産」  
【定置網漁業】

宮津の漁港のうちで、田井漁港は生産組合の定置網、小田漁港は大型定置網、養老漁港は規模の大きい定置網と小定置網で、周年操業である。雑魚・カタクチイワシ・サワラなどをとる。

養殖漁業としては、中津漁港（栗田漁港泊地）を拠点として、湾の中でマダイ・ブリの養殖、栗田湾ではトリガイの養殖が行われている。現在、事業規模でトリガイ養殖を行っているのは京都府だけである。これらの漁港の中で、最も古い「漁師町（宮津港漁師地区）」について解説する。

## ②漁師町の漁業

『京都府の地名』によると、近世宮津の漁師は慶長 5 年（1600）、田辺籠城の際、細川藤孝を助けて田辺へまもり送ったご褒美として、「長刀一柄波打際三間御領地内勝手次第立働き御免之御書頂戴」（『宮津旧記』）したと伝えられる。

それ以前の京極高広の宮津城下形成以前に、漁師がどこに住んでいたか定かではないが、慶長 7 年の下宮津検地帳には多くの「れうし」何某があがっている。

京極氏による城下町が完成した時、漁師町は現字漁師の地に定まったという。



図5 漁師町の位置（1：10,000）

〔資料〕「宮津市史」

【漁師町地図】

明治 42 年（1909 年）の『京都府漁業誌』（京都府水産講習所）には、当時の漁師町の漁業として地曳網 7 種・手繰網 7 種・刺網 8 種・旋網 2 種・漕網 1 種・延縄 3・2 本釣 7 種・雑漁具 2 種の漁法の名がみえる。それらのなかにはすでに行われなくなって久しいものも多く含まれている。

しかし、この漁師町の漁場で古くから培われてきたそれらの漁法にみられる特徴は、漁場や魚種に対する漁師町の伝統的な感覚や知識として、今も生き続けているものである。

ここでは、イワシ地曳網を例に取り、漁師町の伝統漁法と水産加工について解説する。



〔資料〕「宮津市史」

【漁師町の遠景】

### ③イワシ地曳網

地曳網は袋網を真中にしてその左右に翼網と引網をつけた漁具で、陸上を拠点として沖合から引き寄せ陸岸に引き上げて魚を捕る。沿岸に回遊するイワシ・アジ・サバ等の浮魚類を漁獲対象とする。操業場所や対象魚によってさまざまな規模のものがある。



〔資料〕「宮津市史」

【イワシ地曳網漁の状況】

漁法は漁船（トモブト）2 艘に網を片方ずつ積み、各 3 人乗って漁場に出る。これを網船という。また漁船 3～4 艘に各 2～3 乗って網船に従う。これを小船という。漁場に着くと船はちらばって魚群の回遊を待つ。水鳥が群がったり、魚がはね上ったりして魚群が来たことがわかると、網船は網をつなぎ合わせてから袋網を投げ入れ、小船の指揮に従って双方が必死にこぎ分れつつ、翼網・沖荒事網・磯荒手網・引網を投入しながら陸に向かって進む。他の小船はおろした両翼網の浮子縄を持ち、魚群が逃げないように注意する。

網船が河岸にこぎ着くと、浮子縄を持つ小船以外の者はみな浜に上がり、双方が同一の歩調で引網を引き寄せる。荒手網にくると二人が浮子縄を、他の者が沈子縄を持って引く。袋網まで引き寄せると、タモ網やブンギリとよばれる竹籠で魚をすくいとり小船に入れる。小船はすぐに市場にこぎ着けて魚を売却し、網船は他の小船とともに再び漁場へ向かう。

漁場は、宮津湾内の遠浅で底が砂泥のところで、水深は 7～8 ヒロ（尋、10.5～12m）である。イワシ地曳網の漁期は 3 月～5 月と 10 月～12 月の 2 回である。主にイワシ・サ

バ・アジ・カマスを中心に、マグロ・カツオ、サワラ・その他の雑魚が漁獲物である。

イワシ地曳網は地曳網のなかでもっとも代表的なもので古くから行われ、宮津では天正年間（1573～92）に創始されたといわれるが、江戸時代を通じこの地域の重要な漁具であった。京都府沿岸でも江戸時代から明治にかけては、ほとんどの漁村でイワシ地曳網が使用されてきた。

#### ④イワシ加工・砂干魚から搾粕へ

明治・大正・昭和の中頃まで、丹後の海は毎年2月上旬から5月下旬まで、とくに真イワシの大漁の時季で、その6割を加工原料として、残りは全部魚肥として処理された。

この魚肥は砂干魚といい、その方法は、新鮮な生イワシは砂が着きにくいいため、一晩ぐらい浜辺に貯めて置き、血がにじむ頃を見計らって、砂を充分つけて体形を真っ直ぐに整えて並べ干し上げた。製造された砂干魚は米俵を利用し約30キロ（約8貫目）入れられた。

明治の初め頃からその干場は、砂が細かいことと日当たりが良いことから、天橋立の小天橋の浜が利用された。当時はまだ浜の利用は自由であった。

製造した砂干魚は丹波地方から播州方面、一部は但馬方面へも出荷された。この砂干魚は田植えが終わり、一番草を取った時に、苗と苗との間に一尾ずつ差し込み肥料とした。化学肥料のなかった当時には需要が多く、各地から商人が買い付けにやってきた。

しかし、明治38年（1905）に天橋立が与謝郡郡営公園に指定され、干場の利用が禁じられ、かわりにそれ以降、漁師町の浜を干場として利用することとなった。

ところが、明治41年（1908）12月に魚肥製造が許可制となり自由にできなくなった。漁師町で魚肥製造が許可されたのは雑魚屋の七戸のみであった。

時代の変化のなかで大正5年（1916）頃から油粕類や化学肥料が出まわりはじめ、砂干魚の使用が減少しはじめた。そこで従来の砂干魚造りは新しい搾粕（しめかす）造りへ変わっていったのである。

この搾粕は生イワシを大釜で煮上げ、底や脇にすき間を設けた搾桶に押し掛けて水分を搾り上げ、天日で干し上げて製品とした。

この時季は天候が悪く、長雨や梅雨時には日干しができないため、虫がわくのを防ぐため石灰を振りかけた。このように砂干魚が搾粕に変わり、養老・伊根方面の海岸にはずらりと釜場の煙突が建ち並び、搾粕の生産は宮津よりも大きく上回った。

大正末期からおこなわれた搾粕製造も、化学肥料の使用増大と環境衛生上のきびしい規制から、昭和30年頃を最後に姿を消した。

#### ⑤現代の漁師町漁業

現在の漁師町の漁業者数は約25人で、その内訳は大網12人、アサリ掘り（月採）10人、ナマコ曳き10人である。この数字は固定されたものではなく、その年々の好不漁によって変動し、漁師は自分の得意とする漁を季節に応じて組み合わせておこなってきた。

アサリ掘りは通年おこなえるが、その年々によって貝の好不漁の年がある。1月から3月は少ないので、アサリ掘りの人が大網の網子として雇われて漁に出る場合もある。5月から6月頃になると殻が割れるほど実が大きく育つ。



また7月から9月までスズキの値が良いため、一本釣をおこなう。他の月は値が安い  
ため、アサリ掘りや大網の網子にもどる。

ナマコ曳きはフナコシ（船越）から日置にかけて、桁網を引っ張っておこなう。ナマコ  
にはアカナマコ・クロナマコ・アオナマコの三種類があるが、アカナマコがもっとも値が  
よく、アオナマコの約三倍の値がする。

### （3）漁業風習

海は大漁をもたらしてくれる恵の場である反面、荒れ狂って漁師を死へと引き込む場  
もあった。漁師は「板子一枚下は地獄」といって、常に危険にさらされる仕事であったた  
め、自然に対する恐れと敬いから、「ゲンが良い」とか「ゲンが悪い」とかいってよく縁起  
をかついだ。とりわけ不漁につながる言葉を嫌ったほか、生死にまつわる穢れにはやかま  
しかった。

○「漁に出るとき、猫などが行き先を遮るといったん家に帰り、もう一度出直す。」

○「蛇や猿、猫や親とかの話はするな。」

かわりに蛇は「ナガモン」長いもの、猿を「エテコウ」、猫は「パケモン」とか「ミ  
イさん」とか言い換えていう。また、狐を「イナリ」、鯨を「オヤジ」ともいう。

○「弁当には梅干しを入れるな。」梅干しは天神さんで、海に捨てるな、持って帰ってこ  
い。空になることを「すい」といい、漁獲が空になることにつながる。

○ 同じ例で「オカラを入れるな。」オカラが空につながる。

○「小豆御飯は弁当に持たすな。」また、小豆御飯などは一口神さんにどこでもよいので、  
供えてから食べる。

○「朝飯は全部食わずに一口残しておけ。」これは縁起ではなく、よく聞かれる戒めで、  
万一、船が流された時に腹が空いていたら困る。

○「刃物は海に落とすな。」海中に落としてはならないものとして、金物や刃物、梅干し  
の種などがある。それは水の神様が嫌うからである。もし刃物を落としたら、一銭  
をその場所に投げ入れ、許してもらう。

## 4. 港を介して蓄積された経済力に基づき、人々の生活の中で育ってきた「みなと文化」

### （1）遊里

北前船が港に入ると、船乗りたちはこぞって花街へ出かけ、縞の財布が空っぽになるま  
で遊んだという。

その様子を唄ったのが、「二度と行こまい丹後の宮津 縞の財布が空となる 丹後の宮  
津でピンと出した」という民謡「宮津節」である（（2）文芸②俗謡の項で解説）。

宮津には、京の祇園と肩を並べるほどの数の芸妓衆がいたと伝えられ、元花街の宮津市  
新浜には今でも格子の町屋があり、当時の面影を残している。



【新浜地区の町並 1】（筆者撮影）



【新浜地区の町並 2】（筆者撮影）



【新浜地区の町並 3】（筆者撮影）



【新浜地区の町並 4】（筆者撮影）

格子戸や手すりのある二階など、風情ある町並みが残る。空家になっている建物もいくつか見受けられる。



【新浜地区の建物 1】  
（筆者撮影）



【新浜地区の建物 2】  
（筆者撮影）



【新浜地区の建物 3】  
（筆者撮影）



【お地蔵さん】  
（筆者撮影）

現在新浜地区の外れ(国道 173 号線に面する場所)に、宮津節の石碑が建てられている。  
近くにある「見返りの柳」がわずかに当時を偲ぶよすがとなっている。



【宮津節石碑】(筆者撮影)



【見返りの柳】(筆者撮影)



【地域起しの拠点・宮津ぴんと館】(筆者撮影)



【海側に立つ商業施設】(筆者撮影)

## (2) 文芸

### ① 来遊文人

宮津に関連する来遊文人として与謝蕪村を挙げる。

与謝蕪村(1815～1859)は江戸俳諧中興の祖といわれ、俳画の創始者である与謝蕪村は、宝暦 4 年(1754)から 3 年あまりを宮津で過ごし、「丹後時代」と称されるほど数多くの作品を残した。宝暦 3 年(1753)、宮津見性寺の竹溪(蝕誉上人)が京都東山の百韻興行で蕪村に出会って意気投合し、宮津へ誘ったのがきっかけという。

翌 4 年 39 才の時、宮津へ来て見性寺にわらじをぬいだ。「新花嫡」に「昔丹後宮津見性寺といへるに三とせあまり宿りいにけり」と書いている。時の藩主は青山幸道であった。

ここで近所の真照寺の鷺十(恵乗上人)や無縁寺の両巴(輪誉上人)ら浄土宗・真宗の俳僧らと親しく交わった。

丹後時代の句として

前に細川ありて潺湲(せんかん)と流れければ

夏川を越すうれしさよ手に草履

がある。



画家としても精力的に活動しており、「天夫橋図賛」「妖怪絵巻」は俳画のさきがけを思わせる作品で、丹後時代の作品は、現在知られているだけでも三十点以上残っている。宝暦7年（1757）秋、42才の年に帰京した。



【見性寺山門】（筆者撮影）



【見性寺山門〈「蕪村寺」の名がある〉】（筆者撮影）



【見性寺境内】（筆者撮影）



【蕪村句碑】（筆者撮影）

見性寺の庭に立つ句碑

「短夜や六里の待つに更け足らず」  
の句は近江栗津無名庵の雲裡坊が訪れた際、別れを惜しんで橋立で詠んだもので、蕪村研究家として知られる河東碧梧桐の筆である。見性寺には江戸時代のものとしては山門より残っていない。



【「与謝蕪村遺跡」の石碑】  
（筆者撮影）



【境内の各所に置かれた俳句】  
（筆者撮影）

## ②俗謡

宮津の俗謡で最も有名なものは「宮津節」である。

1 番までが良く知られており、歌詞からも当時の宮津の繁栄ぶりが伺える。

- 1 二度と行くまい丹後の宮津 縞の財布が空になる 空になる  
★丹後の宮津でピンと出した（以下★部分最後に繰り返し）
- 2 天橋立日本一よ 文殊菩薩に知恵の餅
- 3 行こか戻ろか橋立なぎさ いとし宮津の灯がまねく
- 4 月が出ました 橋立沖に 金波銀波の与謝の海  
（月が出ました 黒崎沖に 金波銀波が鼓打つ、とするものもある）
- 5 今日とは帰ると橋立見れば とまれとまれと啼く鴉
- 6 雨の降る灯は傘松下で 二人成相与謝の海
- 7 天橋立松青々と 汲んでみせたい磯清水
- 8 唄の宮津は入船出船 恋のかけ橋一文字

===== 唄囃し =====

- 丹後縮緬 加賀の絹 仙台平には南部縞 陸奥の米沢 江戸小倉  
丹後の宮津でピンと出した
- 昨日北鮮船出して 日本海の波まくら 今宵新浜ひざまくら  
丹後の宮津でピンと出した

## ③謡曲

中世の丹後は、説話や寺社縁起などの形でさまざまな伝説が語られた「伝説の時代」であった。

世阿弥改作の能『丹後物狂（たんごものぐるい）』は、父子再会の曲である。

丹後白糸の浜に住む岩井殿が、橋立の文殊に参籠祈誓して子・花松を授かるが、訳あって勘当。悲嘆した花松は橋立で入水。しかし助けられ僧となる。文殊堂で説法をしていると、子を亡くし狂気の父が現れ再会を果たす。世阿弥の伝書に最も多く引用された作品で、奈良春日神社や大坂本願寺でも人気の曲であった。

『九世戸（くせのと）』は、智恩寺（宮津市）で現在 7 月に行われている文殊会（出船祭）とその縁起を舞台化した風流能で、15 世紀初頭までに成立した『九世戸縁起』に基づいて作られたとされる。竜燈伝説を扱った説話で、文殊門前には、昭和 10 年（1935）まで竜燈の松があったと言われている。

## (3) 祭り

## ①『宮津祭』

- ・開催場所：山王宮 日吉神社（京都府宮津市宮町 1408 番地）、和貴宮神社（京都府宮津市宮本 428 番地）
- ・開催日：5 月 13～15 日

宮津の旧城下町は、西堀川を境に、大きく東町と西町に分けられる。両地区にはそれぞれの氏神があり、東地区は「和貴宮神社」、西地区は「山王宮 日吉神社」の氏子となっている。

藩政期、『山王祭』といわれ4月の2の申の日に行われていた山王宮 日吉神社の祭礼は、明治の改暦により5月15日に、幕末より始まった和貴宮神社の祭礼は9月11日に行われていたが、第二次世界大戦後、二つの祭りは同じ5月15日に行われるようになった。

これにより、東西二基の神輿（みこし）が出るようになり、同時進行でそれぞれの祭礼を行うようになった。宮津祭の名は「藩祭・山王祭」の俗称で武士や宮津全町の町衆が春の山王祭には挙って参加したために名付けられたものである。



〔資料〕天橋立観光協会 HP



【宮津祭】

祭では漁師町の浮太鼓（市指定文化財）が奉納される。浮太鼓は漁師町にのみ伝えられる芸能で、古くは同町が日吉神社の神輿を出す役を担っていたことと関係がある。

屋台に大太鼓を載せて打つ様式と肩に担ぐ様式があり、どちらも巡行の際に神輿に付いて、日吉神社と御旅所を移動する。ゆったりと、時に早いリズムで太鼓を打ち、撥を持つ手を頭上で振り回し、飛び跳ねるなどの大きな所作に特色がある。

#### （４）資料館

丹後国分寺跡近くに位置し、丹後半島全域の民俗・考古・歴史の各分野にかかわる展示を行っている。

住所：宮津市字国分小字天王山 611-1



【京都府立丹後郷土資料館（ふるさとミュージアム丹後）】



## 5. 港を中心とする社会的・経済的営みの総体として形成されてきた「みなと文化」

### （1）港・海運に関する歴史的施設

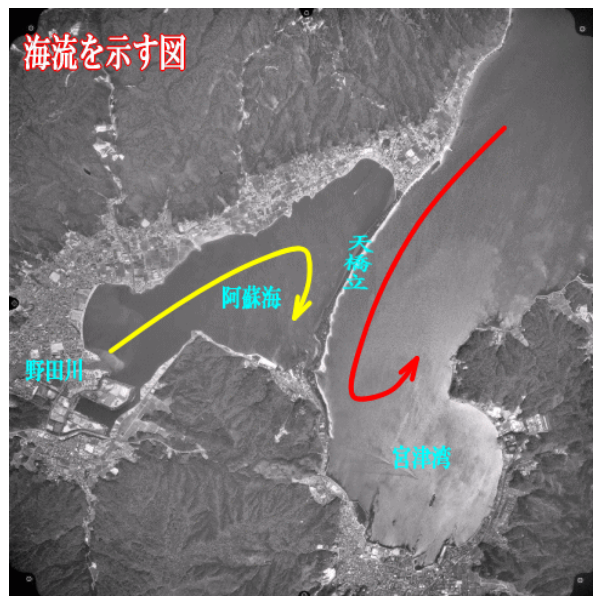


〔資料〕「美の風景」

【天橋立地図】

『天橋立』は、陸奥の『松島』・安芸の『宮島』とともに、日本三景とされている特別名勝のひとつである。幅約 20～170m・全長約 3.6km の砂嘴(さし)でできた砂浜で、大小約 8,000 本もの松が茂っている珍しい地形で、その形が天に舞う白い架け橋のように見えることから『天橋立』の名が付いた。

今から約 4000 年前、世屋川をはじめとする丹後半島の東側の河川から流出した砂礫(されき：砂礫とは砂や小石)が海流(下の図の赤色の線)により流され、野田川の流れからくる阿蘇海の海流(下の図の黄色の線)とがぶつかったことにより、江尻側よりほぼ真っ直ぐに砂礫が海中に堆積してきたものといわれている。



〔資料〕京都府土木事務所 HP

【天橋立の海流】

「日本三景」という発想が最初に見られるのは、林羅山の子、林春斎が寛永 20 年（1643）に、松島を天橋立・厳島とともに「三处奇観たり」と述べた『日本国事跡考』にあると言われている。

その後元禄 2 年（1689）に、福岡藩の儒学者貝原益軒が天橋立を旅行した記録『己巳紀行』（きしきこう）の中には、「・・・そして府中から成相寺へ登ることになり、その坂の途中で、此坂中より天橋立、切戸の文珠、橋立東西の与謝の海、阿蘇の海目下に在て、其景 言語ヲ絶ス、日本の三景の一とするも宜也、・・・」とあり、ここで初めて「日本三景」ということばが登場する。

笠松公園からの「股のぞき」は有名で、一瞬目の錯覚により、天橋立が天につながっているように見える。



【天の橋立遠景 1】（筆者撮影）



【天の橋立遠景 2】（筆者撮影）

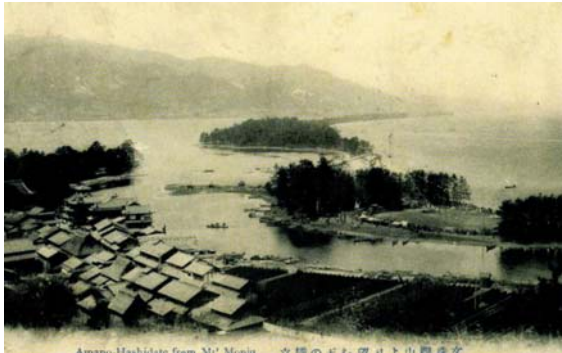


【天の橋立遠景 3】（筆者撮影）



【成相山に登るケーブル】  
（筆者撮影）

以下では、早くから観光地として開けた天橋立の、明治・大正時代の絵葉書画像を紹介する。



〔資料〕「美の風景」  
【明治後期から大正 10 年頃为天橋立】



〔資料〕「美の風景」  
【明治後期から大正 10 年頃为天橋立】



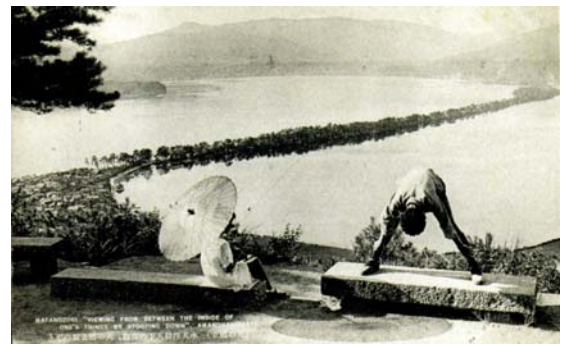
〔資料〕「美の風景」  
【大正 12 年～昭和 10 年頃为天橋立】



〔資料〕「美の風景」  
【大正 12 年～昭和 10 年頃为天橋立】



〔資料〕「美の風景」  
【大正 12 年～昭和 10 年頃为天橋立】



〔資料〕「美の風景」  
【大正 12 年～昭和 10 年頃为天橋立】

## （２）港町の町並み

### ①常夜灯の土台石

新町近くの国道沿いに常夜灯の土台石が残っている。上の建造物は、土台石の上に後から構築されたものである。





【常夜灯土台石 1】（筆者撮影）



【常夜灯土台石 2】（筆者撮影）



【常夜灯土台石由来を記す石碑】（筆者撮影）



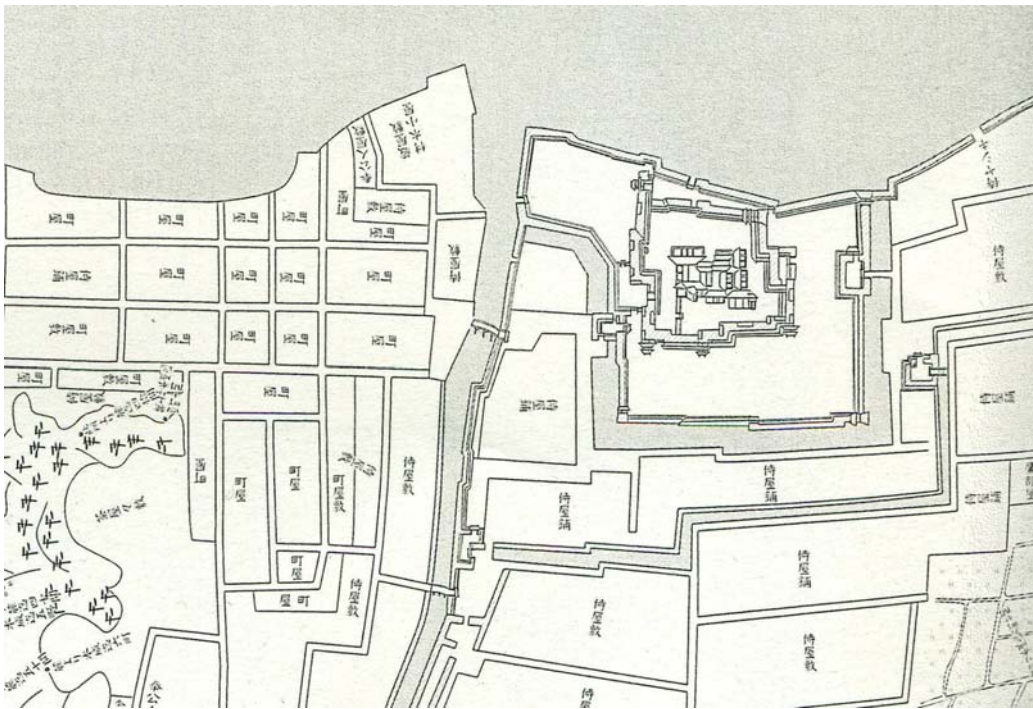
【常夜灯土台石付近の地蔵】（筆者撮影）

## ②町割

宮津の町割はかなり大掛かりな変更が加えられている。

特に廃藩置県の際、宮津城が取り壊されたことで、城周辺の町割については、わずかに残る遺構から推測する以外にない。

また、江戸期より積極的に埋立てが行われたことで、当時の海岸線を推測することも困難である。江戸期の地図と照合すると、寺町周辺は比較的当時の町割が残っている。



〔資料〕「宮津市史」

【正保宮津城絵図案・正保2年（1645）頃】



〔資料〕宮津市教育委員会資料

【現在の宮津市（宮津城を点線で示す）】



### ③建物

旧宮津城付近の現場写真を示す。



【市役所裏の大手川 1】（筆者撮影）



【市役所裏の大手川 2】（筆者撮影）



【宮津市役所】（筆者撮影）



【市役所周辺の旧宅】（筆者撮影）

### ④寺町地区

寺町地区には、先に紹介した見性寺と大頂寺以外にも多くの寺がある。



【寺町・仏性寺】（筆者撮影）



【寺町・妙蓮寺】（筆者撮影）

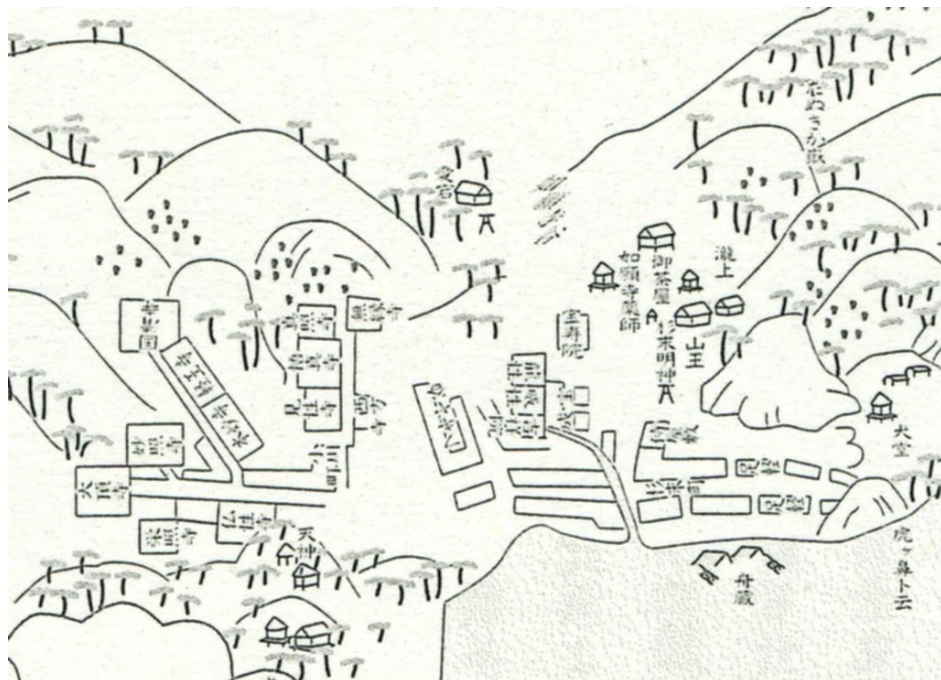




【寺町地区の案内表示】（筆者撮影）



【寺町の町並み】（筆者撮影）



〔資料〕「宮津市史」

【与謝之大絵図 享保9年（1724）寺町付近地図〈大頂寺・山王などの名が見える〉】

### （3）港の景色（みなとの文化的景観）

#### ①眺望点：天橋立雪舟観展望休憩所

天の橋立十景のひとつで、雪舟の水墨画・国宝「天橋立図」は、ここからの眺めを描写されたといわれている。



〔資料〕天橋立観光協会 HP

【天橋立雪舟観展望休憩所より天橋立方向】



〔資料〕「美の風景」

【雪舟筆 天橋立図（部分）】

天橋立図は、画聖・雪舟が最晩年に描いた大型の水墨画で、室町時代後期の丹後府中の様子が詳細に描かれている。

加えて寺社名など文字による書き込みが二十一ヶ所あるほか、朱色を挿す建物がある。本画以降に制作された天橋立図は、近世までは多くが本画と同じ構図を採用していることは注目される。

天橋立図は早くから知られ、写されていたものと推察される。

構図は右方に天橋立を、左方に智恩寺を配し、下方に栗田半島を、上方に成相寺の山頂を頂点に府中のまちなみを描く。

また、右下隅には沖合の冠島と沓島をあえて画中に取り込んでいる。

## ②象徴的景色、文化的景観：天の橋立十景

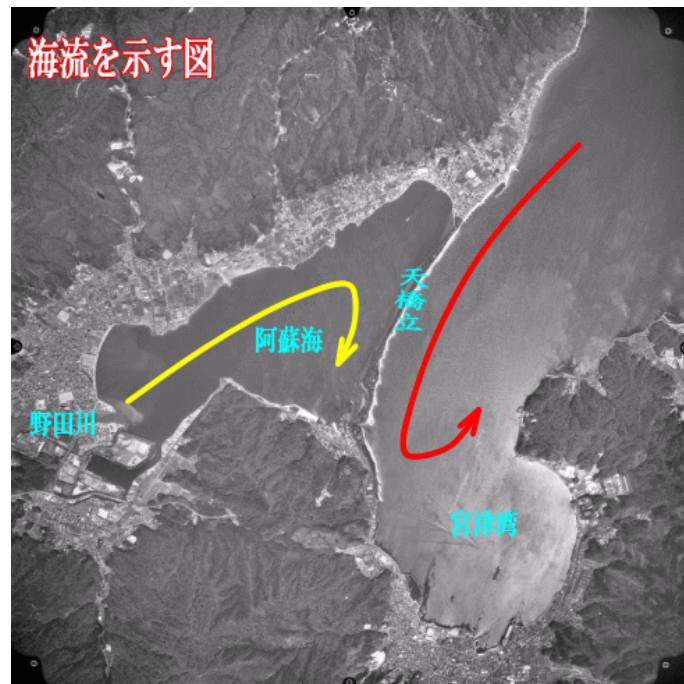
天の橋立十景を下記に紹介する。

- 1 雪舟観：獅子崎
- 2 蒼龍観：島崎公園
- 3 八幡観：上宮津八幡山
- 4 弓ヶ観：滝上山
- 5 飛龍観：文殊山
- 6 智恩観：智恩寺 智恩寺から二本松まで
- 7 一文字観：大内峠
- 8 天平観：国分寺跡
- 9 股のぞき観：笠松公園
- 10 天上観：仙台山

### 第3章 「みなと文化」の振興に関する地域の動き

#### 1. 天橋立サンドバイパス工事

サンドバイパスとは、砂浜に沿って流れゆく砂が人工構造物などに移動をさえぎられたため、その上手側に堆積したものを下手側の海岸に人工的に移動させる一種の養浜工である。



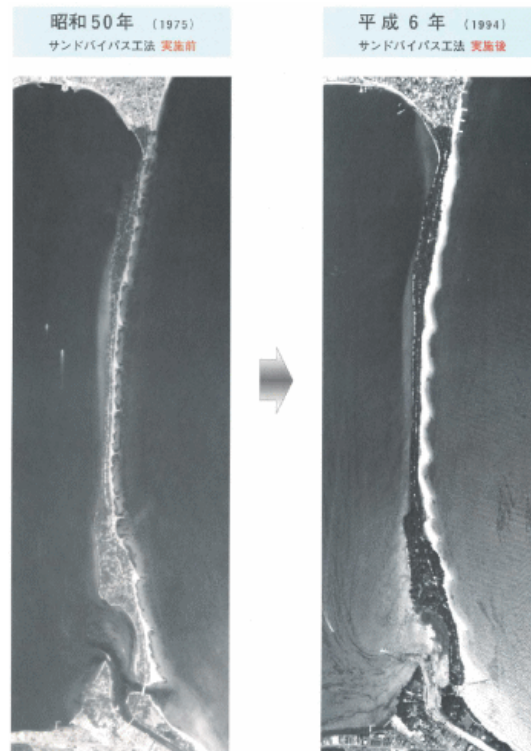
〔資料〕京都府土木事務所 HP

【天橋立の海流（再掲）】

天橋立は大自然が作り出した現象として、学術的にも貴重な砂浜であるが、河川からの流出土砂の減少や、沿岸漂砂を遮断する構造物が砂の流れの上手側に設置されたことによって漂砂が到着しなくなり、その存在そのものが危ぶまれるようになった。

その対策として「サンドバイパス工法」が採用され、昔の面影を取り戻してきた。サンドバイパス工事とは、日置及び江尻の両堤防付近に堆積する砂を船で運搬し、大天橋付け根に投入し、あとは波のエネルギーによって天橋立全域に行き渡らせる方法である。





〔資料〕京都府土木事務所 HP  
【サンドバイパス工事の成果】

## 2. 蕪村まつり

宝暦4年（1754）、俳人・与謝蕪村が丹後与謝地方に赴き、その後宝暦7年（1757）までの3年間、丹後地方の活動拠点として、宮津市にある見性寺に滞在していた。

寺町周辺は「蕪村ゆかりの地」として、毎年、『蕪村まつり』を開催している。見性寺では蕪村を偲び、法要が行われる。

《引用文献》

- 「北前船の時代」 牧野隆信 教育社 昭和 54 年（1979）  
「日本海運史の研究」 柚木学 法政大学出版局 平成 17 年（2005）  
「西廻り航路の湊町をゆく」 西山芳夫 文献出版 平成 12 年（2000）  
「丹後新風土記」 丹後広域観光キャンペーン協議会 平成 20 年（2008）  
「京都の水産」 京都府水産事務所発行 平成 23 年（2011）  
「昔の暮らしと村の文化」 鬼塚史朗 著 あまのはしだて出版 平成 18 年（2006）  
「宮津市史 別冊（宮津の民俗誌・宮津の民家建築）」 宮津市史編さん委員会編 平成 17 年（2005）  
「宮津市史 絵図編」 宮津市史編さん委員会 編 平成 17 年（2005 年）  
「宮津市史 通史編 上・下巻」 宮津市史編さん委員会 編 平成 14 年（2002 年）  
「美の風景」－天橋立と名所屏風絵の世界－ 京都府立丹後歴史資料館 平成 23 年（2011 年）  
「宮津民謡の会パンフレット」（発行年不明）

《HP 関係図等出所》

- （社）天橋立観光協会 HP  
<http://www.amanohashidate.jp/rekishi.html>  
京都府 HP  
<http://www.pref.kyoto.jp/>  
丹後土木事務所 HP  
<http://www.pref.kyoto.jp/tango/tango-doboku/>